

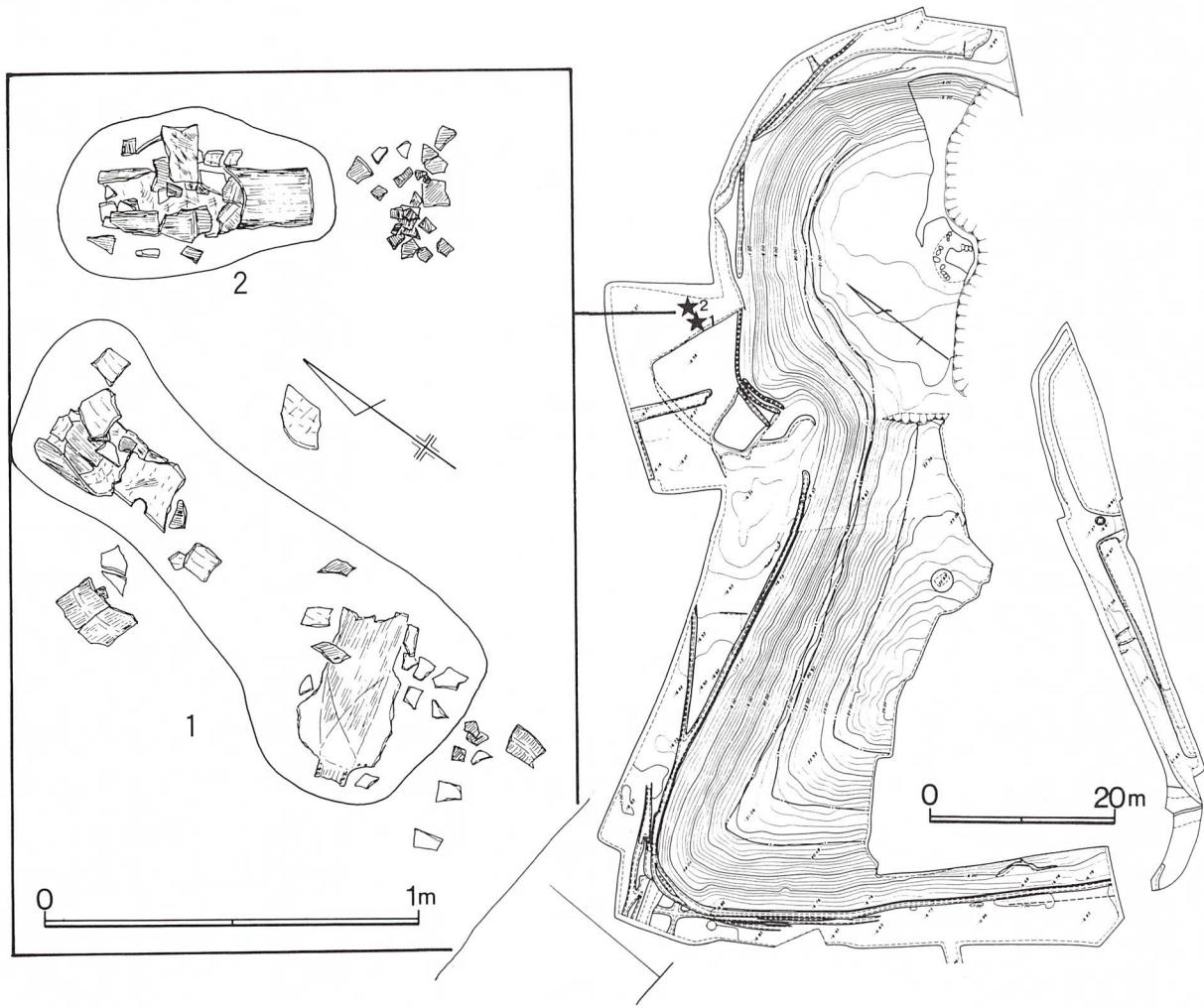
埼玉將軍山古墳出土の鞍形埴輪

岡 本 健 一

1 はじめに

明治27年に発掘され、多くの遺物が出土したことで知られていた埼玉將軍山古墳を復原整備するため、県立さきたま資料館では、国保補助事業費を受けて平成3年度より発掘調査を行っている。発掘調査の成果や出土遺物については、平成4年度企画展『さきたま將軍山古墳と銅鏡』で、また横穴式石室については『調査研究報告』第7号拙著で一部を発表している。

平成5年度の調査では、造り出し付近の周堀から鞍形埴輪が、ほぼ完形に近い状態で出土した。將軍山古墳では他に、盾や馬、人物などの埴輪が出土しているが、いずれも小片で全体を復原することは現状では困難である。その点でこの鞍形埴輪は將軍山古墳の埴輪祭祀についての重要な資料である。



第1図 将軍山古墳鞍形埴輪の出土状況

古墳時代の弓矢の収容具として、鞍と胡籠が知られている。前者は、「鎌を上に向けて矢を納め背負って使用する」もので、後者は「矢羽を上にして矢を納め腰に下げて使用する」ものである（註1）。奈良時代以降は胡籠の方が一般的となり、鞍は儀仗用として残っていくにすぎない（註2）。形象埴輪では、鞍は鞍形埴輪として埴輪祭祀の中心的な役割をもつほど、多く作られているのに対して、胡籠を単独に表現したものはなく、人物埴輪の腰に貼付されているにすぎない。それは器形が平面的で樹立に際して面的効果をあげるという理由だけでなく（註3）、鞍自体に「神秘性乃至呪術性ある武器」という観念があると考えられていたからである（註4）。

鞍形埴輪は、古墳に形象埴輪が樹立され始めると早い段階で、4世紀後半には畿内の古墳ではすでに登場している。墳頂の主体部を包囲するように方形区画に立てられ、死靈を悪邪から守る役割をもっていた。その後鞍形埴輪は盾形埴輪とともに、器財埴輪の中心的な器種として連綿とつくれていく。人物埴輪が登場して以降、6世紀の前半くらいから鞍形埴輪もその器形を大きく転換して、いわゆる「奴廐形」鞍形埴輪があらわれ、関東地方全域で盛行する。従来は関東特有の埴輪と考えられていたが、最近では畿内でも出土例があり、その起源は畿内にあるとする意見が強くなっている。本稿では、これまであまり注目されなかった、この「奴廐形」鞍形埴輪について埼玉県内出土のものを中心に形態分類を行い、將軍山古墳の鞍形埴輪の諸問題について論じていきたい。

2 將軍山古墳出土の鞍形埴輪

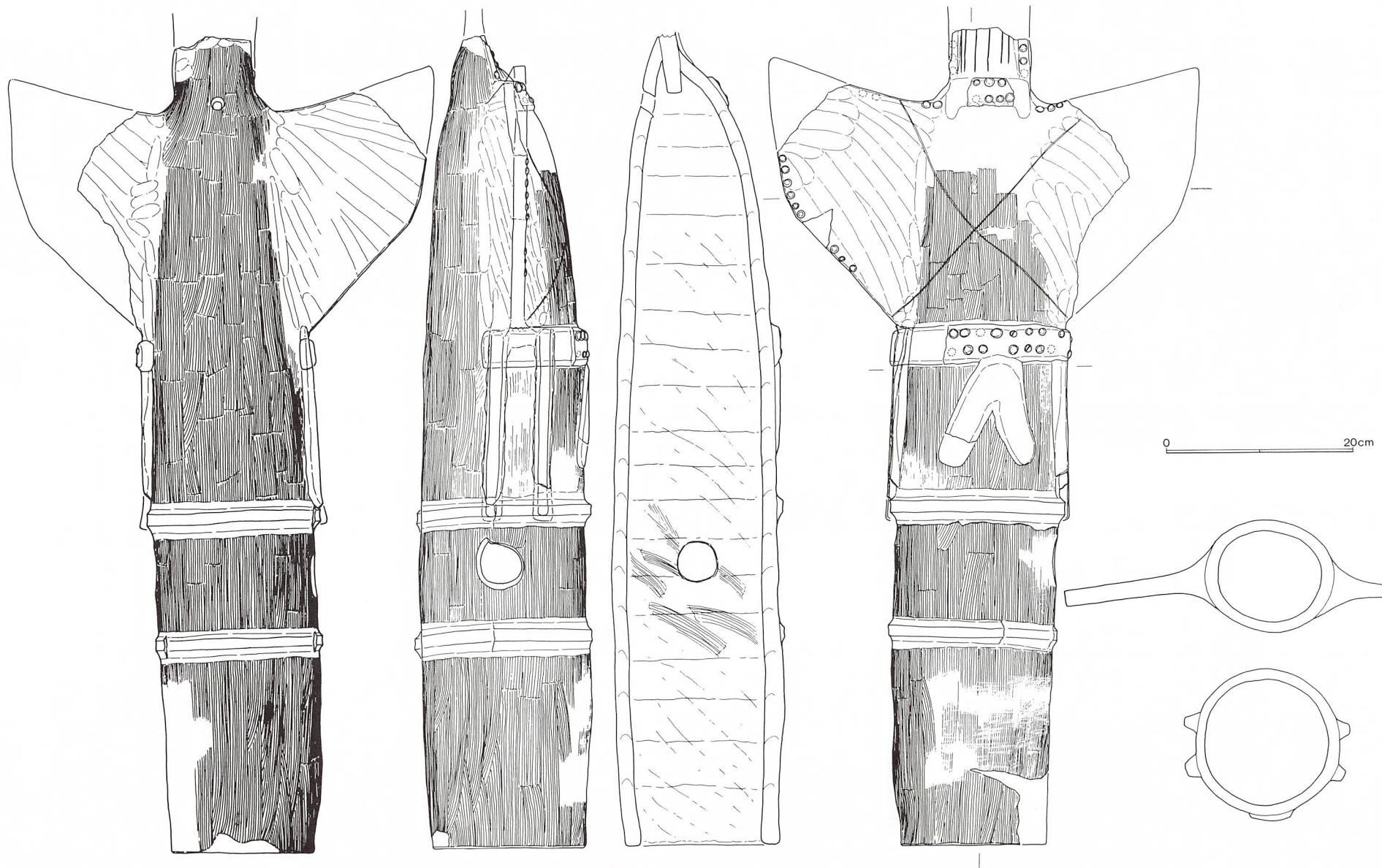
ここで紹介するのは、ほぼ完形に復原された鞍1、基部及び矢筒下部のみの鞍2、そして鎌部のみの鞍3～7である。この他にも鰭にあたる部分が数点出土し、また鞍とは確認できない形象埴輪の台部の破片も出土していると考えられるから、実際はさらに多くの鞍形埴輪があったものと推定される。

【出土位置】 図示した鞍はいずれも造り出しの北側周堀から出土している（第1図）。最も残りのよかつた鞍1と鞍2は造り出しの裾から隣接して出土した。鰭部の破片は造り出しの北側以外にも、くびれ部周堀から多数、前方部墳丘上からも若干出土している。墳丘は流失が激しいため埴輪の樹立状況についてはほとんど情報が得られなかつたが、鞍形埴輪については、その出土頻度からみて、造り出しに並べられていたと考えるのが妥当であろう。一方、盾形埴輪は造り出しの北側周堀からはほとんど出土せず、くびれ部や前方部西側の周堀や墳丘上からも多く出土しているので、鞍形埴輪とは樹立位置を異にしていた可能性がある。

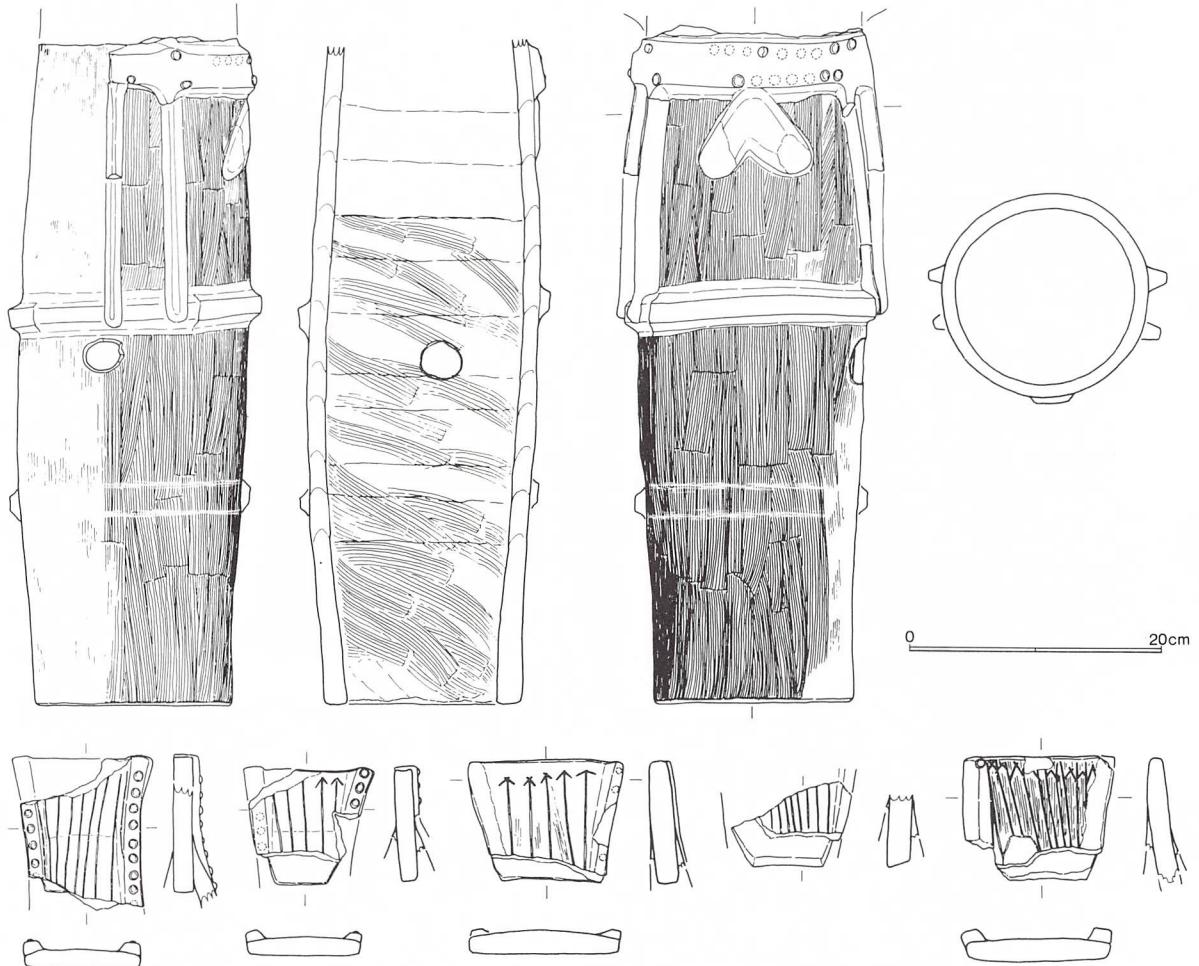
【形態の特徴】 鞍1（第2図）は現高89.4cm、底径15.8cmである。鎌部先端は欠失しており、後述する鎌部の破片と比較すれば、実際の高さは93～95cmくらいであったと推定される。鰭は左側の先端および右側の約半分が欠失しているが、反転復原すると鰭幅は約46cm前後であつただろう。その他、底部の約1/3、鉢止めした横帯や、凸帯などが一部欠失している以外はほぼ完形である。

基部は下から2段目の凸帯までで、ほぼまっすぐ立ち上がる。高さは約37cmである。2本の凸帯間には透孔が左右に穿たれている。

それより上部は矢筒部にあたる。鰭部の下端に接して2列の鉢止めを表現した、幅約4cmの横帯が側面まで巡る。その横帯の下には、背負い紐の結び目を表現したと思われる垂飾りが付く。しか



第2図 将軍山古墳出土 鞍形埴輪（1）



第3図 将軍山古墳出土鞍形埴輪（2）

し背負い紐自体は横帯よりも上部にあり、その機能が全く無視された表現となっている。矢筒の側面、鰭の下には縦に2本の凸帯が、2段目の凸帯まで平行に貼り付けられている。後述するように、多くの鞍形埴輪では、裾のように広がる部分であり、この埴輪の特徴がよく表れている。

鉢止め横帯の上部は矢筒部本体は、鎌部にむかって次第にすぼまっていく。断面はやや左右に長い楕円形である。ここに背負い紐が1本の線刻によって、×字形に単純に表現されている。鰭はやや上方に向かって広がる形態を示し、鰭の周囲全体に鉢止め表現がある。矢筒上端部には、やはり2列の鉢止めを施した横帯が貼りつけられている。この横帯は両端が欠けていたが、剥離の様子から△形をしていったことがわかる。この横帯がある部分の裏面には小孔が穿たれており、焼成時の蒸気抜きの機能をもっているのであろう。

矢を表現した先端部は、長方形の粘土板を矢筒本体に差し込んで成形している。矢は6本単線で表しているが、鎌の先端部は欠けているため不明である。おそらくは矢印状になっていると考えられる。矢の両脇には、矢が脱落しないように鉢止めして施された縦凸帯が表現されている。

調整は基部、矢筒部の表面はタテハケ、鰭部は右下がりの指ナデを施し、内面は一部ナナメハケがみられるが、全体的には指ナデを施している。

鞍2（第3図）は現高54.0cm、底径16.0cmである。基部から矢筒の鰭下横帯まで残存しているが、その形態は鞍1と酷似する。底からこの横帯上端までの高さが、鞍1では57.0cmなので3cmほど低

くなっている。上部の欠失した部分は鞍1とほぼ同じ形態であったと考えてよいだろう。

鞍3～7（第3図）は鎌部のみで、いずれも矢は線刻で表現し、矢の両脇には鞍1と同じく縦凸帯がある。鎌先端部は鞍4、5は矢印だが、鞍7は2本の単線間に山形の線刻で鎌を表している。鞍3、6は不明。また鞍5、7はタケハケ調整を施した後に鎌を描いている。

以上、管見にのぼる限りでは、將軍山古墳の鞍形埴輪は、いずれも鞍1と大きくは変わらない形態をもつものであると推定する。

3 いわゆる「奴廐形」鞍形埴輪の変遷——県内出土品を中心として——

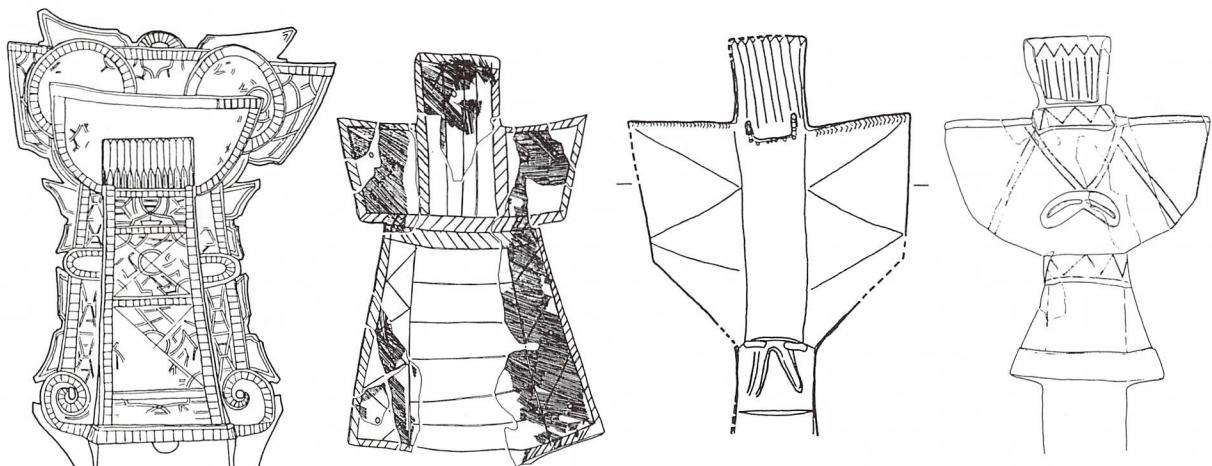
高橋克壽は鞍形埴輪を次のように大きく2類に分類している（註5）（第4図）。

1類 箱形の矢筒部の周囲に板状の造形（背板）を有し、背後に半円筒形の支えが取り付いている。矢筒部と背板には直弧文が多用される。

2類 基底部からそのまま続く半円筒形の矢筒部に、やじりを表した上部の板状の突出部、左右の鰭状の背板とが付き、奴廐形を呈するもの。

1類は器財埴輪の樹立が行われ始めてから、それほど間を置かずに登場し、以後中期古墳に至るまで器財埴輪の中心的な器種として、「聖域」を守る防御的な意味で使用されている。6世紀になると横穴式石室の導入に代表されるように、葬送儀礼の変化とともに埴輪の役割も変わっていった。その中で供献品としてつくられたのが2類であるとした。

会津大塚山古墳や福井鼓山古墳、三重石山古墳、滋賀雪野山古墳などの前期古墳から出土した鞍の実物は、背板の部分は残存が不良のため明らかではないが、直弧文を多用することや全体の大きさからみて、1類に相当する。前期古墳の時期の鞍形埴輪は、実物の鞍をかなり忠実に模倣しているようであり（註6）、2類の埴輪が1類に取って代わるということは、実際の鞍も2類相当のものに変化したことを意味すると考えられる。すなわち1類の特徴的な矢筒部上方に大きく広がる背板を省略すると、矢筒部側面に上下2枚づつの鰭が残るが、その形態はあたかも大阪府三日市遺跡で出土した鞍形埴輪と類似する（第4図）。これを基本形として、全体のバランスから上部の鰭を大き



1類 奈良県宮山古墳(1/24)

2類 大阪府三日市遺跡(1/12)

群馬塚廻り 1号墳(1/12)

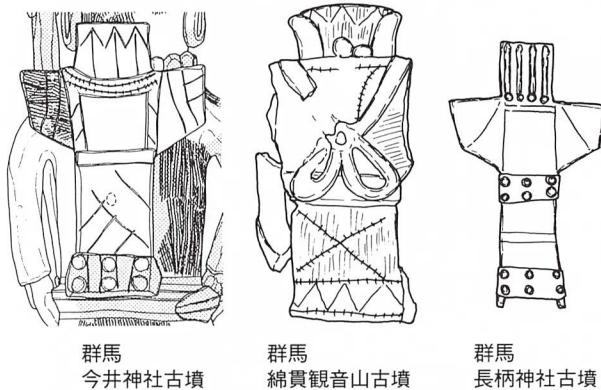
群馬神保下條 2号墳(1/12)

第4図 鞍形埴輪

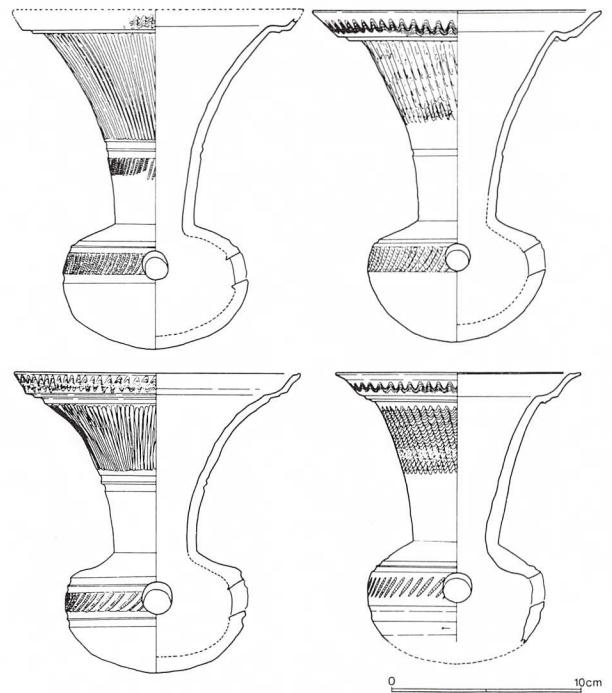
く翼状に広げたものが、典型的な奴尻形に変化するものと考えられる。この器形の変化は、古墳祭祀が直弧文に代弁されるマジカルなものから、世俗的なものに変化したことから発生したのと同時に、乗馬の風習や騎馬戦の登場など、戦闘方法の変化から武器の軽装化が生じ、鞍の背板の簡略化が行われた結果ではないかと考える。この鞍は畿内を中心に、全国的な広がりを見せた。九州では装飾古墳の壁画や、横穴墓の浮彫り、石人などにこの鞍が象られており、6世紀前半には成立していると考えられる（註7）。畿内でも上述の大坂府三日市遺跡や和歌山県箱谷2号墳、奈良県鳥塚古墳や岩室池遺跡などでも出土しているので、奴尻形鞍形埴輪も畿内で成立し、関東に伝わったものと考えられている。しかし、6世紀前半以降の畿内では、埴輪祭式が下火になっていく段階にあたり、全体的に作りは粗雑である。また関東の鞍形埴輪とは鰐の形態などに相違がみられる。従つて、いわゆる奴尻形鞍形埴輪の原型は畿内で登場したもの、それを定型化し発展させたのは関東の埴輪工人であった。すでに坂靖が関東の埴輪祭式の独自性を強調しているところである（註8）。関東のどの地域であるかは、今後の研究の課題ではあるが、写実的なものが多く残されている群馬県地域をその候補に上げておきたい。関東における独自の埴輪祭式の広がりを考察する上で、他の形象埴輪の様相とも関連して分析していかねばならない。

さて埼玉県内で出土している鞍形埴輪は、1類は皆無であり2類のみであることは、関東地域全体の様相と同じである。現在のところ古墳27基、埴輪窯3遺跡から出土しているのを確認しているが、鞍と確認できていない小片を含めると、さらに個体数は多くなるだろう。児玉郡、比企郡、大里郡、北埼玉郡など、県北部の全体に分布しており、大型の前方後円墳から小型の円墳までさまざまな古墳から出土している（第1表）。

型式学的な見地から考察すると、写実的なものから、簡略化されたものへの変化を指摘することができる。最も特徴的な属性は、鎌の表現方法で、粘土を貼りつけたものと、線刻のものと大きく2種類に分けられる。前者をA類、後者をB類と呼ぶとすると、簡略化という点ではA類→B類の変化が考えられる。A類では鎌先端部を忠実に柳葉形または片刃に作り付けたものがあり、B類が矢印であったり、山形であったり



第5図 人形埴輪が背負う鞍



第6図 将軍山古墳出土須恵器

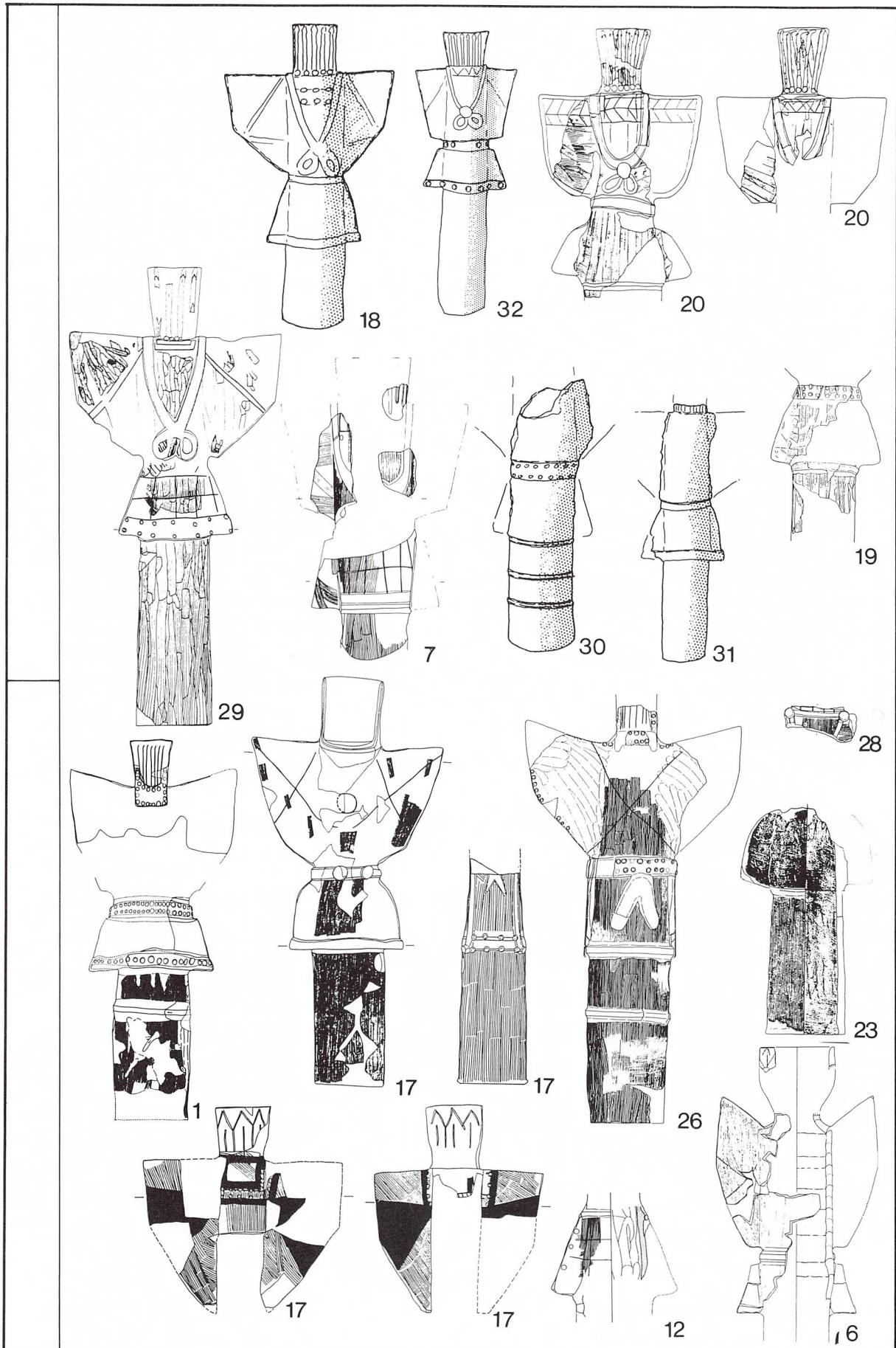
第1表 埼玉県内鞍形埴輪出土地名表

番号	古墳・窯跡名	所在地	墳形	規模m	埋葬主体部	型式	備考
1	生出塚窯	鴻巣市東	—	—	—	I、II-1	
2	長塚古墳	東松山市大谷	前方後円	36	横穴式石室	I	先端部のみ
3	桜山窯	東松山市桜山	—	—	—	II	先端部のみ
4	屋田5号墳	比企郡滑川町月輪	円	18.7	横穴式石室	I	先端部のみ
5	長沖8号墳	児玉郡児玉町長沖	前方後円	26.3	横穴式石室	I	裾付根のみ
6	一本松古墳	児玉郡美里町猪俣	円	—	—	II-2	
7	広木町2号墳	児玉郡美里町広木	円	—	—	I-2	
8	広木町4号墳	ク	円	—	横穴式石室	II	
9	広木町5号墳	ク	円	—	—	II	
10	広木町11号墳	ク	円	—	横穴式石室	I	
11	白岩銚子塚古墳	児玉郡神川町新里	前方後円	46	横穴式石室	—	鰐付根のみ
12	南塚原24号墳	ク	円	—	横穴式石室	II-2	
13	十二ヶ谷戸15号墳	児玉郡神川町池田	円	—	横穴式石室	I	先端部のみ
14	城戸野1号墳	児玉郡神川町新宿	円	16.5	横穴式石室	I	先端部のみ
15	城戸野2号墳	ク	円	11	横穴式石室	I	先端部のみ
16	三ヶ尻林遺跡4号墳	熊谷市三ヶ尻林	円	10	横穴式石室	I	先端部のみ
17	割山窯	深谷市上野台割山	—	—	横穴式石室	II-1	
18	円山2号墳	大里郡大里村箕輪	円	18	横穴式石室	II	
19	小前田6号墳	大里郡寄居町桜沢	円	26	横穴式石室	I-1	
20	小前田10号墳	ク	円	15	横穴式石室	I-2	
21	黒田6号墳	大里郡花園町黒田	円	25	横穴式石室	I-1、II	
22	黒田10号墳	ク	円	17	横穴式石室	II	鰐のみ
23	黒田11号墳	ク	円	14	横穴式石室	I-1	鰐のみ
24	箱崎4号墳	大里郡川本町畠山	円	18	横穴式石室	I?	鰐、裾のみ
25	瓦塚古墳	行田市埼玉	前方後円	73	横穴式石室	II-1	鞍が不明
26	将軍山古墳	ク	前方後円	90	横穴式石室	II-1	
27	奥の山古墳	ク	前方後円	66.5	横穴式石室	II-1	鞍が不明
28	酒巻14号墳	行田市酒巻	円	42	横穴式石室	I-2	
29	酒巻15号墳	ク	前方後円	34.2	横穴式石室	I?	
30	鶴ヶ塚古墳	加須市町屋新田	円	30	—	I-2	
31		大里郡川本町畠山	—	—	—	I-1	東京国立博物館所蔵
32		伝児玉郡	—	—	—	—	埼玉県立博物館所蔵

するのと比べても、A類→B類の変化が推定できる。ただし小前田10号墳のように両類の埴輪が共存している場合もあり、注意を要する。

またA類には、矢筒の最上段、矢の差し込み口に丸い玉が貼付されているものが多い。これは鞍が革で作られているもののなかで、矢を出し入れして差し込み口が磨耗したり破れたりするのを防ぐため、鉢留めして補強したものであろう。これがB類では生出塚8号窯や將軍山古墳のものように、別の部品を鉢で留めるような形になっているものが多い。

次に背負い紐の表現を観察する。粘土紐を貼りつけて背負い紐を表した埴輪を見ると、鰐の両肩から穩やかに下がってきた紐を、中央で大きく蝶結びにしているように見える。円山2号墳や小前田10号墳、埼玉県立博物館所蔵伝児玉郡出土品では、その蝶結びの上に丸い円盤が貼りつけてある。この手法は綿貫觀音山古墳の三人童女の埴輪等でもみられるが、結び目を表現したものである。同じく綿貫觀音山古墳の人物埴輪が背負っていた鞍を見ると明確である。將軍山古墳の背負い紐は線刻で×を描いただけの単純な表現であり、蝶結び部分は背負い紐とは全く分離して、鉢留め横帯の下にデフォルメされて表されている。これは背負い紐の表現を簡略化したものである。群馬県の例では、神保下条2号墳の鞍形埴輪は紐の部分は2本の線で表し、結び目のみは粘土を貼りつけているのも、將軍山古墳の鞍形埴輪の表現方法の1歩点前の簡略化形態といえよう。その他生出塚8号



第7図 埼玉県内出土の鞍形埴輪

窯や割山埴輪窯、東京国立博物館所蔵川本町畠山出土のものなどには、紐の表現はない。鎌を粘土を貼りつけて表したA類には、背負い紐をやはり粘土紐で表現したものが多い。県内出土品を見るかぎりでは、相関関係があるようである。酒巻14号墳出土のものは、鎌を線刻で紐を粘土貼りつけで表しており、中間的な現象といえる。

将军山古墳の鞍形埴輪で、最も特異なのは裾鰐がなく、かわりに縦凸帯を2本ずつはりつけていることである。鞍形埴輪には裾鰐が付き、上部の鰐と裾鰐の境目、および裾鰐の最下端部に横帯を付けるのがとの形である。裾鰐がないのはその退化形式といえよう。同様な形態のものが、割山埴輪窯からも出土していて、縦凸帯が矢筒部周囲に均等に配分されて貼り付けられている点は相違するが、結び目の形などにも類似する点がある。

東京国立博物館所蔵の太田市長柄神社出土の武人埴輪が背負う鞍や、綿貫觀音山の人物埴輪の鞍、同じく群馬の今井神社古墳出土の人物埴輪が背負う鞍などをみると（第5図）、矢筒は箱状で鰐の下部は、やや広がりを見せるが箱状のままであり、鞍形埴輪にみられる裾鰐のような形態ではない。それは九州地方における、装飾古墳の壁画や横穴墓の浮彫り、石人の鞍などでも基本的には同形をしている。このことから、裾鰐は鞍形埴輪の外見を装飾的にみせるためのデフォルメで、前期から続いてきた鞍形埴輪の名残とも考えられよう。

以上の諸点からみて、埼玉県内出土の鞍形埴輪を第7図のように分類した。A-1式：鎌、背負い紐を貼りつけて表現。鎌下に鉢留め。鰐の革綴じの表現など写実的なもの。A-2式：A-1式より表現が粗雑になったもの。とくに背負い紐の表現が単純になる。B-1式：鎌を線刻で表現するもの。B-2式：B-1式よりもさらに簡略化した表現のもの。型式学的にみれば、A-1式→A-2式→B-1式→B-2式となるが、遺構から出土した他の遺物からみた年代観とは矛盾をきたす場合がある。

B-1式及びB-2式に相当する割山埴輪窯の出土品は、報告書では6世紀前半に比定して、一部6世紀後半まで下がる可能性を指摘している。上述した型式学的な変遷の流れから、写実性において最も退化した形態と考えられる。しかし群馬の塚廻り1号墳から出土した鞍形埴輪をみると（第4図）、鎌はB類で裾鰐もなく、表現は全体的に簡略化されているが、他の出土遺物からみて6世紀前半代に比定されている。割山埴輪窯の出土品は鰐の形状などが、これに類似している。それは正面を平らに近く仕上げて、鰐を側面の中央よりも前方に付着させる方法も似ている。このように必ずしも簡略化された表現が新しいとは限らない可能性がある。いずれにしても、割山埴輪窯の出土品は、県内の他に鞍形埴輪とは形態的にも、成形の特徴も異なっている。表現の相違が年代によるものなのか、工人差によるものなのか、判断するのは難しい。

円山2号墳や伝児玉郡出土のものが最も写実的である。類似した形態のものが、群馬県で多く出土しており、採集品が多いためはっきりした年代は不明であるが、6世紀中葉には登場していたであろう。埼玉県では6世紀後半に盛行して、7世紀に入ると急速に埴輪作りが衰えていく。将军山古墳は從来6世紀末から7世紀初頭ころの古墳と考えられてきたが、造り出し周堀から出土した須恵器の臘（第6図）の器形や、横穴式石室の形態が県内では早い段階のものであることなどから、6世紀後半には造られていたことが判明した。しかし、鞍形埴輪を型式学的な観点で見ると、6世紀

末くらいに下げるこどもできる。それはあたかも、これまで年代の根拠の一つとなっていた、石室内から出土した長脚2段高杯の年代と符号する。石室内への追葬儀礼と関連する事象と考えることも可能である。

4 ま と め

古墳時代前期から存在していた鞍は、古墳祭祀の觀念や鉄鎌の変化などによって、大きな背板をもつものから、上方の背板を省略した形の翼状の鰐をもついわゆる「奴駒形」に変化した。6世紀前半には、畿内を中心に全国的な広がりを見せた。本稿では埼玉県内から出土した鞍形埴輪を中心にしてその分類と編年を行い、將軍山古墳の鞍形埴輪の位置づけを行った。埴輪のみの型式学的な分析と、その他の遺物の年代観にはややずれがあり、今後の課題として残った。それは工人による違いや、窯ごとの違いなども考慮に入れなければならないであろう。また関東における形象埴輪祭祀の充実とともに、より一層写実的な表現をとる場合もある。その点からも本稿では、鞍形埴輪の各属性の変化の推移を考慮して論を展開させたつもりであるが、明確な結果は得られなかった。窯跡から出土した資料が少ないため、今後の調査に期待するところは大きい。

埼玉古墳群では稻荷山古墳や瓦塚古墳で多くの形象埴輪が出土している。稻荷山古墳ではトレンチ調査をおこなっただけだが、墳丘西側の中堤造り出し付近で出土したものは人物埴輪が多く、その他には家や盾、馬などの埴輪が少数含まれているにすぎない。瓦塚古墳は墳丘西側の周堀を広範囲にわたって発掘調査しており、人物埴輪をはじめ、家や盾、馬、水鳥などの形象埴輪が出土しているが、確實に鞍と判明しているものはない。將軍山古墳では鞍や盾、馬などの埴輪は比較的多いが、人物埴輪が現在のところ非常に少なく、復原できる個体はない。どの古墳も全体を調査したわけではないので確実なことは言えないが、埼玉古墳群における埴輪祭式では、人物埴輪の樹立が次第に衰退していく傾向があるのではなかろうか。6世紀後半では、鴻巣市生出塚遺跡の窯は最盛期を迎えており、この窯による生産が衰える時期と相前後する現象であろうと考える。この点でも將軍山古墳の鞍形埴輪は、6世紀後半よりも遅れる時期であると想定され、造り出し部から出土した須恵器の駒の年代観とは矛盾する結果となるのである。

【註】

- 1 高橋 克壽 「2 器財埴輪」『古墳時代の研究』9 古墳Ⅲ 墓輪、1992
- 2 末永 雅雄 『日本上代の武器』1914
- 3 勝部 明生 「鞍形埴輪小考」『横田健一先生古稀記念会 文化史論叢』上、1987
- 4 千家和比古 「Ⅲ 胡蘇について」『上総山王山古墳』、1980
- 5 高橋 克壽 「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71卷2号、1988
- 6 勝部 明生 前掲註3
- 7 埼玉稻荷山古墳では、鞍を背負う人物埴輪が出土している。しかし、この鞍には大きな鰐がつくことはなく、装飾もほとんどない。埼玉に奴駒形鞍が伝わる以前の、より実用的な鞍であったのであろう。
- 8 坂 靖 「埴輪文化の特質とその意義」『権原考古学研究所論集』第8、1988